



女性のための情報誌

# NETWORK

NO. 12

## 目次

特集 男の自立 女の自立	2
◇それぞれの自立	4
ねっとわあくネットワーキング	8
ウーマン ス克蘭ブル	10
婦人の海外研修報告	12
国際交流のひろば	13
ねっとわあく らいぶらりい	14
ポプリ	15
あとがき	16



静岡県

# 男の自立 女の自立

【特別寄稿】

## 男の生き方が問われている

群馬大学教授 山口 富造

### 桜の下の宴

立と平等が重要だといわれています。立の大きなうねりが押し寄せてきています。あり、「役割意識の見直し」であり、「能力を発揮そしてこれらの変化が波及して、男性に生活的自立を求めています。豊かな国といわれもう一度、自分の生き方を見直してみま

昨年、のちようど今頃、かつての軍国少年の同期の桜が同じ桜の下で同窓会を開いた。初老を迎えた男たちと何人かの妻たち、ぼつぼつ窓際が定年後の天降り人生だ、くよくよすることはない、これまでごぶさた勝ちだった同窓会へもこれからはつとめて出ることにしよう、かくいう私もその一人だった。幹事の気くばりの甲斐あって、手頃な場所に、宴に必要な品々もとのつた。だが、敷物の上に鎮座した男たちの手は一向に動かない。そのうち、マメな男たちがゴソゴソはじめて「取りあえず」一杯やり出したが、長年の習慣で黙って坐れば食事がスツと目の前に出てくると信じている大半の男た

ち、待てど暮らせど酒肴は現れない。するとどうだろう。同行した私の妻はじめ女性たちが、見兼ねてイソイソと手伝いはじめたではないか。私はこれをきびしく制止した。その理由は——誓って言うが、ふだん夫の私にさへ減多にしないサービスを友人に対してしたこと、嫉妬したためではない。おそらく社会では○長と呼ばれる地位に永く坐り続けて尊敬を集めてきたに違いない男が、妻の介助なしには自分一人の酒肴の準備すらまなならず、他人の妻に「願います」（海軍用語）と手を挙げる仕儀となることについて、フト感ずるところがあったからに他ならぬ。何気なしに手を挙げたに違いない友人には申し訳ないが、桜の下の宴にはふさわしくない次のような思いにふけてしばらくの間、苦い酒を飲んだことを憶えている。

### 何を語る

#### 熟年男性の死に急ぎ

子連れパパが増えている。妻に、蒸発され残された子どもを抱えて立往生、しかも近隣の日頃のつき合いも忙しさにまけておろそかだった会社人間では、いざというとき「近くの他人」の助けを借りるすべもなく、切羽つまった挙句、死を選ぶケースも少くない。昭和三十年頃には二十才代が多かったの逆に、最近では熟年世代の男たちの自殺が急増しているという。その原因は、生活苦や事業資金に困ってなど、男にのしかかる稼働責任であることは言うまでもないが、自身の身辺介護すらままならぬ上に、子どもを抱えての立往生が拍車をかけたにちがいない。

職場では名刺をふりかざして、

人間が人間らしく生きるためには、自男性と女性で構成する社会で、今、自それは、女性にとっては「社会進出」でしようという意識の高まりです。立を求めています。豊かな国といわれもう一度、自分の生き方を見直してみま

上下左右の複雑な人間関係を如才なく振舞ってきた男たちが、五十路の坂を越える年頃になってから思い悩むのは、これから先に待ち受ける妻と二人きりの長い人生をどう生きようかということだと、夕刊家庭欄はしきりに書き立てる。会社人間が寝るだけの家庭では、家具や調度のデラックス化の反面で、いつの間にか自分が疎外されたよそよそしい場所になっ

ていないか。給料は振り込みだし、こどもの教育や隣人のつき合いも妻まかせ、ひたすら働いてたまの休みも会社のつき合いゴルフというのでは疲れはたまる一方、日本生産性本部の調査では、サラリーマンの十人に一人は何らかの精神異常が認められるという。高度成長の支え手として仕事に打ち込んできた熟年世代の多くが定年を前にして、第二の人生の目標を会社以外のどこに置くかに思い悩んでいるというのが実状だろう。

一方、亭主に視野の狭さを笑われてきた妻は、主婦業のあい間に培った実力を生かして、会社ならぬ社会への進出を果たし「主夫」にもなり切れぬ亭主とは逆に、定年後にわかに元気をとりもどしたという話もある。

### 男の生活進出のすすめ

かくなる上は道はふたつだ。会社で精力を使い果たし、帰宅後は女房子どもの連合軍の攻勢を前にして逆上し、「誰のおかげで食ってるんだ」などと絶望的な叫び声をあげる道と、いまひとつはみずからすすんで厨房に進出して、「私が

いないとカラキシ駄目なんだから」などとうそぶく女房の鼻をあかすだけでなく、これまで会社で培ってきた「気くばり」や研究心や精力を、暮らしの全般にわたって応用してみようという道だ。この道は上司の指示によってでも、会社や社会の発展という「至上命令」のためにすすむ道でもない。したがって、楽しく、ゆとりをもってすすむことが肝要だ。社用ゴルフのように、一つ打っては考え、二つ打っては首をひねるようなムズカシイ顔は、ユメ、してはならない。これまで女こどものする事とさされてきた、暮らしの中のこどももの中に楽しみを発見する、それが自身の充実につながることを男たちが知ることが、わたしたちの社会進出のためにもまた、不可欠なことでもあるのだ。

### プロフィール(筆者による自己紹介)

昭和二年生まれ、昭和五〇年より現職、趣味は料理と釣りと自転車。但し、後二者は前者の材料あさりすぎぬことを最近自覚するに至り、取り下げのことを思案中。



# それぞれの自立

「私」を主語に話してみませんか

「自立」というと、今まで多くの人が、「自分の働きで自分の生活を支えられること」として、まず経済的に自立することが必要だと主張してきました。しかし、職業を持ち、充分生活していける収入がありながら、精神的には自立できていない場合もあることを指摘して、何が何でも経済的自立をという考え方に疑問を持つ人が増えてきています。

また、収入を伴わない社会活動や、ボランティア活動を通して、「自分自身の意志を持って行動し、自己実現の欲求（生きがい）を見い出す」など、精神的に自立していく女性

今、静岡県に九人の女性弁護士がいる。

熱海駅前前のビルに構えた事務所、同業の御主人と二人で働いている橋本裕子さんもその一人である。県婦人問題推進会議委員、県公害審査会委員、熱海簡易裁判所調停委員、又熱海市役所での法律相談等々、弁護士という資格を生かした錚々たる肩書きが並び、さぞ威風堂々とした人だろうというこちらの思い込みは、会ったとたん吹き飛んでしまった。細身な身体にファイトいっぱい、さわやかな笑顔を絶やさぬ自然体。社会の中で生き生きと個性を発揮している美しさにあふれた人であった。

橋本さんは東京生まれで東京育ちの四十歳。三人姉妹の長女として父親の期待を込めて育てられ、小さい頃から自分では意識しないのに、いつの間にか仲間の先頭に立っていたような子だったという。弁護士を志したのは高

が多くなってきたことも注目されています。自分が自立するために、欠けているのは何か、少しだけアンテナを高くして、自分を見つめ直してみませんか。今までとは違った生き方に、出会えるかも知れません。私たちが今、どのような考えを持って暮らしているかで、次の世代の子供たちの意識も変わってきます。私たち一人一人が、自立をめざして生きていくということは、子供たちを、自立した人間に育て、社会の流れを変えていくためにも、大変重要なことではないでしょうか。





校二年の時。友達多くはエリートサラリーマンの妻を目指して、大学や稽古事を選ぶのに必死になっていたのを傍に、「同じ努力するなら、自分が自分として生きる事の為に努力したい」と願った事に始まる。そのような時にTVで「判決」というドラマを見て、河内桃子演ずるところの女性弁護士が、この仕事の素晴らしさを教えてくれ、決心したそうだ。両親はもとより、高校の先生までが反対したのを押し切り入った大学では、法律を学ぶ多くの男子学生の中であって、差別を感じなかった橋本さんが初めてそれを感じたのは、社会に出てからだだった。女である事が判ると、依頼者が戸惑うのをよく感じたという。これは、男社会の中で、女性が意思決定の場にいない為、男性が女性の意見を聞く事に慣れていないからだと感じ、この様な社会の仕

組を変えていくには、女性が社会の一員としての自覚を持って、自分でものが言えなくては流れは変わっていくのだと考えた。自分で考え行動することや、自分が一人の人格として認めてもらおうということは、決して男性と対立したり突張ったりすることではないと語る橋本さんの口調には、女性みずからの努力を期待する思いがこもっていた。

橋本さんにとつての自立、それは「橋本裕子個人として認めてもらうこと」だという。

他人に迷惑をかけずに暮らしたいと願う人は少なくありません。けれども日常何不自由なく過ごし、平和な日々を送っている者にとつて、自立の壁が見えるでしょうか。

いったん何かが起きて、初めて自立のむずかしさに気づき、こんなはずではなかったということになります。そうならないように、確かな自分の土台づくりをしたいものです。

外に出て働くこともひとつの道、家庭の仕事しながらの自分なりの自立を探るのもまたひとつの道なのです。

「私は原僚子でなく、原先生のお嫁さんとして呼ばれてきたの。」

個性を持った一人の人間としてではなく役割の名で通じてきたということをそんな言葉で言いながら、彼女の顔はきらきらと輝いていた。僚子さんは会社員の夫と、三人の子供をもつ四十一才の女性。義母の原先生は、茶

道のお師匠さん。

高校時代からショートカットがよく似合う、スポーツ万能の人だった。二十年以上の時間を経て目の前にいる彼女も、やはり髪を短く切りつめ、ジーンズで軽く身をひるがえして近づいてきた。

「私ずっと義母が言う通りに髪ものばし、選んでくれた洋服を着て、一生懸命お稽古をして良い嫁、よい後継ぎになろうとしていたの。」夫や子供のため、親のため何の抵抗もなかったという。

ところが、家でおやつを作ったり、子供の洋服を作ったりよい嫁・よい妻を努めている彼女の傍で遊ぶ子供を見て、「奥さん、この子寂しそうだね。」と、他人に言われたことから、今のままでは子供のためにならないと感じ、外に目を向け始めた。

「お嫁さん」から抜け出し自分のやりたいことを実行に移せたのは、夫の転勤が幸いした。せっかく都会に来たのだから、ここでしかやれないことをしようと、お菓子作りを本格的に勉強した。それで自信がつき、こうあらねばならぬという梓がふっ切れたという。静岡へ戻り、教室を探して教え始めてから、トントン拍子に話が広がって、今では喫茶店の手作りケーキもまかされている。

彼女が「自立」しようと思死にがいた様子もない。いつのまにか今の自分があったと言っているようであった。

人それぞれ、いろいろな家庭環境があるけれど、出来ることから始める、それが自立につながる第一歩だと身をもって示してくれて



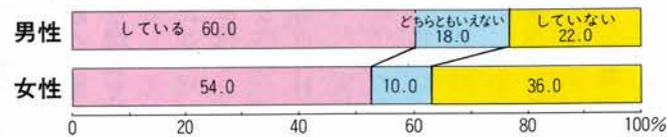
梶邦夫さん(四十才)は新聞社へお勤めの、文字通り家事をしている男性。きっかけは、学校の先生である妻がどうしても時間的にやりくりできない部分を、必然的に分担したこと。掃除、洗濯に始まって食事の仕度や買物、子供の世話まで、さりげなくこなしている。記者時代には、病気の子供を傍に記事を書いたこともあったとか。洗濯物を干している姿を、他人に見られたくないという男性自身の「身中の虫」は?と尋ねると、「ありません」と一言、爽やかな答えだった。

そのルーツを探ると、何でも自分でやりなさいと育てられたこと。権威あるものに一度は否定して掛かるという時代風潮の中で育ったこと。それが何をしてでも生きてゆけるという自信となり、現在の梶さんの自分流の生き方の源になっている。だから、自分にも、他人にも、こうあるべきだという枠をもって

いないと言っ。何事にもこだわりをもたない自由な考え方をとする梶さんだが、仕事以外に楽しんでいる手作り家具は、「しろと屋」というブランドで売られてもいるというから、そのこだわりは尋常でない。そのこだわりのためにこそ、他のすべてが存在すると思える程だ。現在、出版の仕事がされているが、つくるといって、より自分らしさを求めて仕事をするという、梶さんの考えを満たしている。

ものをつくるという、自分を一番充足させてくれる時間を作り出すために、それ以外の時間をできるだけ切りつめるようにしている。その経験から、世の奥様方もっと家事を工

### 「あなたは自立していますか」



### 〈自立していないと思う理由ベスト5〉

- | 男性              | 女性             |
|-----------------|----------------|
| 1. 親から独立していない   | 1. 経済的に十分でない   |
| 2. 精神的に         | 2. 家庭の仕事は親任せ   |
| 3. 社会的に認められていない | 3. 精神的に        |
| 4. 経済的に十分でない    | 4. 生きがいを持っていない |
|                 | 5. 親から独立していない  |

夫して、余った時間を日常的なことから全かけ離れたこと、運や意外性で結果が左右されるような事などをしてみると、世の中は家事のようにきちんと運ぶものではないということが、わかるだけでもプラスになるでしょうと、笑って勧めてくれる。

自分が心地よい生き方をするために、専業主婦か否かを問わず、何をどうしたら良いのか、「自分」を「自分」でお考えなさいと、自立の根本を教えてくれているようだった。

(註) 前号(1号)で吉水みち子さんが、自分自身の中に自立を阻むものがあると喩えたもの。

いる。原先生のお嫁さんでなく、原僚子として自分を語ることが出来る一人の女性が、確実にそこに存在した。そして四月、ヨーロッパへ研修に飛び立とうとしている。

人生わずか五十年の時代から、八十年の時代を迎えています。男性の場合、五十五歳で仕事から解放されても、あと二十余年の老後が待っています。仕事に追いついていられ、家庭人としては粗大ゴミにされかねない男性には、実につらく苦しい現実かも知れません。しかし、その現実をどう乗り越えるかは、男性自身の自立いかんにあるようです。自分の事は自分でできる! こんな気持ちで生きられたら、老後は案外快適かも知れません。

たとえば、榛原町には一人暮らしの老人が百十六名(二月末現在)います。そのうち男性は四人で、その一人に大正二年生まれの山本春雄さんがいます。

私が伺った日、家のまわりには丹精込めて作った大根がいっぱい干してあり、部屋の中にはナツメロのカセットをガンガンかけ、リズムカルに切り干し大根を作っている山本さんの姿がありました。こうしてできた切り干し大根を袋に詰め、市場に持って行くのが山本さんの毎日の仕事です。

山本さんが家事をやるようになったきっかけは、奥さんが長年病弱だったため、自然に

## あなたは自立していますか?

—男女各50人に聞いてみました—

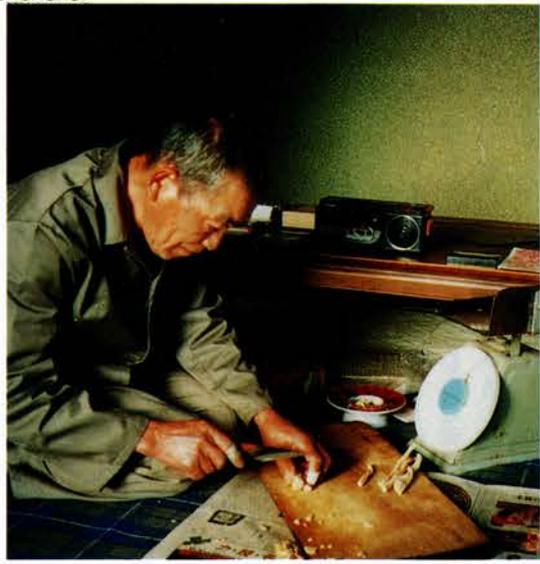
### 〈あなたの思う自立ベスト5〉

- | 男性             | 女性             |
|----------------|----------------|
| 1. 親からの独立      | 1. 経済力が十分ある    |
| 2. 妻子を養う事ができる  | 2. 自分自身が確立している |
| 3. 経済力が十分ある    | 3. 生きがいを持っている  |
| 4. 自分自身が確立している | 4. 親から独立している   |
| 5. 社会に認められている  | 5. 人間性         |

(62.12 編集部調査)

家事の分担が増えていったからだそうです。でも青春のほとんどが軍隊生活であった山本さんにとっては、炊事、洗濯、掃除もそれほど苦痛には思われなかったそうです。

よく他人から「一人で暮すのは不自由じゃあないですか」と聞かれるそうですが、物も豊かになり機械がすべてやってくれる現代は、本当に楽な世の中だと言います。自分の口に合うものを、自分の食べたいように作り、自分なりに生きていく事は、慣れてしまえば普通だと思っようになりました。



榛原町で年二回行われている「一人で生活している高齢者の集い」にも意欲的に参加し、山本さんいわく「普通の生活」をより良いものにしてしようとしている姿勢には、頭の下がる思いがしました。

山本さんにとって、青春時代の体験からそれほど苦痛でなかった家事等も、もし今の男性達が三十年から四十年後、一人で暮すことになったとしたら、これほどスムーズに適應する事ができるでしょうか。

ある年代になると、自分はどうな老人になるのだろうか、老後はどのような生活になるのかと、あれこれ考える事があると思いますが、「自分の事が自分でできる」という自信は、老後を心豊かに暮していくのに一つの大きな力になるという事を、山本さんに会って感じました。